

|                  |  |
|------------------|--|
| Title            | 社会化と社会的規範意識  |
| Sub Title        | Socialization and consciousness of social norms  |
| Author           | 佐原, 六郎(Sahara, Rokuro)   |
| Publisher        | 三田哲學會  |
| Publication year | 1958   |
| Jtitle           | 哲學 No.34 (1958. 1) ,p.225- 247   |
| JaLC DOI         |  |
| Abstract         | <p>This thesis consists of the following five parts: (1) Those who are to be socialized, (2) Those who try to socialize others, (3) Dessocialization and resocialization, (4) Socialization of individuals and socialization of culture, (5) Consciousness of social norms. Below we summerize its essential arguments. When we inquire into the whole process of "socialization," it is important to make clear the following three elements in the process: "whom," "who," and "what." By "whom" we mean those who are to be socialized, by "who," those who try to socialize others, and by "what," contents of socialization, namely consciousness of social norms, or subjective aspects of culture as ways of thinking and behavior. Thus we can define "socialization" as the whole process by which individuals (who are to be socialized) are led to develop the consciousness of social norms stimulated by other individuals or groups (who try to socialize them). Socialization means, in some sense, the limitation of freedom of individuals by confining their ways of thinking and behavior within narrower range. But whether socializing stimuli coming from outside be conceived as pressure or not depends upon the nature of the social norm given to them; dispositions, traits, past experiences etc. of those who are to be socialized; attitudes of those who try to socialize others, and so on. Men may be led to conform to social norms with more or less easiness and promptness. But if the majority of a group are socialized, the possibility of both the maintenance and security of the group itself will greatly increase, unless some disturbing situations occur. By the term "consciousness of social norms" we mean the feeling or sense that a person's consciousness of social norms is not only his own, but also entertained by others in common. So it may be said that the same consciousness is felt as if it were shared by so many persons at the same time. Therefore, even if a person loses his share of the consciousness, he may expect others to retain their shares. Thus the consciousness of social norms may be considered exterior as well as interior to a person. This is the reason why this consciousness has two attributes, that is social and normative. The social nature of this consciousness can be explained by the sense of plurality of those who share the same consciousness and the normative nature, by the power of constraint which press upon those who entertain the same consciousness. We have tried to make clear the three elements of socialization and to explain the social and normative nature of the consciousness of social norms which are the contents of socialization. And our conclusion is as follows: socialization can be successfully attained when social norms which seemed at first as external and heteronomous to a person become internal and autonomous, thus leading him to conform to those norms spontaneously.</p> |
| Notes            | 小林澄兄先生古稀記念論文集  |
| Genre            | Journal Article  |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000034-0225">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000034-0225</a>  |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 社会化と社会的規範意識

佐 原 六 郎

- 一、社会化の対象
- 二、社会化の媒体
- 三、非社会化と再社会化
- 四、個人の社会化と文化の社会化
- 五、社会的規範意識

一

一般に個人も集団もその生活又は運営が順調に進み、比較的に安定の状態が顕著である場合、彼等がその現状をできるだけ永く維持し、発展させようと望み、かつ努力するのは当然の傾向といふべきである。けれども人の生活に浮沈があり、集団の運営に盛衰のあることも、特に時間的経過の面から見るとき、否定しがたいところである。

現状維持といい、現状打開といい、それは各人又は各集團の目的乃至利益に照らして判断され、要望されるものであるから、そのような判断や要望の由つて来るところの万般の事情を明かにし、十分に検討した上でないと、簡単に維持又は打開の得失を論ずることはできない。未だ組織なく、制度化されず、無定形のまゝに止まつている人類というような最大の全体社会は別として、少くとも組織化され、制度化された個々の部分社会は国家にしても教会にしても、又村落や家族にしても、それが歴史を重んじ伝統を誇るものほど、内部に種々の慣習、道德、規約その他の規範が発達している。社会はそこに生れてくる子供や、新加入の成員をこの規範に照らして統制し、それによつて社会そのものの維持と発展を計ろうとするものである。そこでは人々の人格を彼等がその中で生れ、かつ生活している社会文化的大宇宙を反映する小宇宙のように形成することが求められ、そのような人格の形成こそは社会の眼目と見做されている。かくて社会化とは個人の思惟行動の様式をその社会又は集團のなかで広く是認され、尊重され、かつ奨励されている社会的規範に適合するように形成又は変容する過程であり、又簡単に、社会的規範意識を発達させる作用だと考えることができる。社会化は又文化人類学者の定義するように、人間性の素材が特定の文化型に当てはまるように作られていく過程であるとか、或は既存の文化が人から人、世代から世代へと伝達される過程であるとかいうように、文化乃至文化型に重点を置いて解釈することもできる。なぜならば文化乃至文化型はそれが何等かの統一体をなし、体系をもつものである以上、それぞれの社会又は集團に所屬する成員達によつて要求され、期待される思惟行動様式としての社会的規範の性質を帯びるものと考えられるからである。

さて社会化をその全過程について考察するとき、まず問題となるのは誰に、誰が、何を社会化するのかということである。こゝでは誰に、を以て社会化の対象、誰が、を以て社会化の媒体（媒介者又は媒介集團）、更に何を以て

社会化の内容、内容を意味するものとして、その各々について簡単な論述を試ることとする。その場合、社会化は結局その対象たる個人が媒介者乃至媒介集団を通して特定の内容、即ち社会的規範意識を他律的又は自律的に発達させる過程だと云い得る。他方又社会化は既に社会化された人々が、未だ社会化されていない人々に対して一定の社会的規範に基づく統制を加える作用とも考えられる、その場合統制を受けるもの、例えば新しく生れ又は加入してくる未熟者乃至新参者の側から見れば、社会化はその社会の成員たるに相応した思惟行動様式を学習する過程となる。従て社会化も、それが実現されるためには、一般学習過程成立に必要な条件に基いていなければならない。それらの条件のうち最も根本的なものとしては(1)個人のうちに何等かの身体的緊張状態のあること。(2)環境内のある事物に多少の注意が向けられること。(3)注意された事物に対する反応がその個人の緊張状態に多少の変化を生ぜしめること、の三条件<sup>(註1)</sup>が挙げられる。

社会化は常に人々の相互作用である。既に社会化されて一定の社会の成員たるに適したものとなつたと自他共に許すような人でも、決してたゞ一方的、受動的に思惟行動の規範の様式を注入され、それをそのまま鵜呑みにしたものと見るべきではない。社会化を以てある個人が社会に共通する思惟行動様式を単に模倣することに過ぎないとするのは正しくない。なぜならば人は誰でも何等かの先天的素質、特殊の個人的経験の堆積及び種々の対人関係を持ち、従て同じ社会化的刺激に当面しても、それに反応する彼等の態度や用意にはおのずからそれらの素質、経験、関係などの微妙な組合せから成る独特の個性が滲み出てくるものと見なければならぬし、又社会化の対象たる個人の側には特定の思惟行動様式採否についての選択の自由が多少とも残されているからである。それ故社会化の媒介者乃至媒介集団がどんなに強制しても、果して当人がこれに同調するか否か、又同調するとしてどの程度の

同調となるかは必ずしも予断し難い。規範はすべてこれに違反するもののあることの予想に基いてはじめて成立するものであり、違反の可能性の絶対にならないところには規範の存在理由も認められない。M・シエリフ<sup>(註2)</sup>も云う如く社会化は時として個人にとつて、社会的状況からの要求と彼自身の欲求との間の葛藤を含むことがある。又成長しつゝある個人にとつて食事、睡眠その他生命維持のための諸活動に対してすら標準化された規定に同調しなければならぬのが不愉快又は苦痛であるような場合もある。個人は又外部から加えられる矯正手段の方が、これに対する自分の抵抗よりも強くなり、或は又それが本当に肝要なものとしてみずから進んで受容し得るようになるまで、与えられたる社会的価値又は規範への同調に対する抵抗を持続することも屢々ある。

社会化的刺激に対する個人の抵抗の面は社会化の精神分析的解釈によつて極めてよく説明されている。この解釈に従えば社会化とは人格の発達に抑制を加えることであり、しかもその抑制を甘んじて受けるためには、人は何等かの心理的代償を払わされるものである。例えばこゝに一人の子供がいて、その親は子供の意志に反して世間並みの行動をとらせようと統制を加えんとする。この場合子供は不満を抱きつゝ、親の権威に抑えられて世間一般の風習に同調させられるであろう。これは子供を社会化することになるのではあるが、しかしその社会化には親の加える強制と、子供の抱く欲求不満とが含まれている。もちろん子供が親の統制に服さないで抵抗又は反撃の態度に出ることもあろうが、多くの場合、それらの抵抗や反撃は処罰を以て禁止されてしまう。禁止は更に不満の念を潜在的に残留させて噴出のための別の機会、別の手段を与えるようにするかも知れない。けれどもどんな人でも集団の一員としてその機能をよく果たすためには当然集团的に認容され、尊重され、奨励されている規範的行動様式を身につけなければならない。しかもその行動様式の大部分は成員の欲求を個別的に充足させるためよりは、むしろ集

団を維持存続させるという全体的目的に重点を置いて発達してきたものであるから、個人の欲求不満は、それがどんな形式で現れるとするも、無視され、不問に付されてしまいがちである。又もし個人の欲求不満がその行動に現れて集団の要求への同調を妨げているとするならば、それは社会化の失敗に終つたことを意味する。以上述べたように社会化を以て人格形成への社会的抑制過程と見做し、そのうちに含まれている欲求不満と抵抗との面を重視したことは社会化の精神分析的解釈として注目し得る。

すべて人がある集団に所属し、一定の地位を占め、一定の役割を引き受けて何等かの社会的機能を分担する場合、それは集団が加える統制又は拘束に服することを意味する。そしてその統制なり拘束なりは、どんなに緩やかな程度のものであるとしても、やはり成員の思惟行動の自由を多少とも制限するものである。従てもし人が集団のこのような統制や拘束に服しないとすれば、その場合、集団の圧力は公然又は隠然その人に迫つてきて、そこに緊張関係が起らざるを得ない。<sup>(註4)</sup> I・L・チャイルドが社会化を定義して「非常に広い範囲にわたつていろいろな行動上の可能性をそなえて生れた個人が遙かに狭い範囲——その個人の所属集団の標準からみて慣例的であり、しかも彼にとつても受諾できるような範囲——に限定された現実的行動を発展するように導かれる全過程である」とした点にも社会化が行動の範囲をせばめ、それだけ自由を制限するものであることをよく示している。けれども外部から加えられる社会化的刺激が圧迫又は拘束として受けとられるか否かは規範の内容、それを受ける人の素質と習性、或は相手の出方、その他の諸事情に依ることであつて、少しも圧迫又は拘束の感じを抱くことなしに、はじめから自発的に社会化されていくこともあれば、又当初に圧迫を感じ、拘束を意識したにかゝらず、やがて規範の合理性と公益性を認識して積極的に進んでこれに同調するようになることもある。要するに同調又は適応に難易遅速の

差はあるにしても成員の多数が社会化されるならば、その集団の維持及び発展の可能性は、他に特別の妨害的事情のない限り、増加することとなる。

- 註1 T. M. Newcomb, *Social Psychology*, 1950. P. 51.
- 註2 M. Sherif and C. W. Sherif, *An Outline of Social Psychology*, Revised Edition, 1956. P. 7.
- 註3 佐原六郎著 社会心理学 一九五七年 一四五頁
- 註4 I. L. Child, "Socialization", *Handbook of Social Psychology*, Volume II. ed. by G. Lindzey, 1954. P. 655.

二

社会化は一方では未だ素朴で何の躰も訓練も経ていないわがまゝ勝手な人々を統制して、既存の社会的規範に同調させる過程であると共に、他方ではそのような同調者を多く作ることによつて集団そのものの結束を固め、以てその存続発展をはかる自己維持的統制の手段である。それならばそのような社会化の働きかけは誰が引きうけて行うのであろうか。それは云うまでもなく社会化の対象たる個人の周囲にあつて、彼と直接間接の交渉を結ぶ他の先行者又は既存集団の成員であるに違いない。これを子供の場合について見るならば、両親及びその他の家族成員が最初の、又最も影響力の強い社会化的媒介者であるのが普通である。もちろんそれには例外も少くない。事情によつてはよその家族、或は孤児院、養育院その他の社会施設が媒介集団として生家の果すべき社会化的機能を代行することもある。このように子供が生れてから青年期に及ぶまでの感受性と可塑性の最も強い相当永い時期を家庭又はそれに類する集団のなかで過し、両親またはそれに準ずるものの保護と指導のもとに置かれるということは、社

会化の媒介集団としての家族の意義の極めて重要であることを示している。

社会化過程の性質は、例えば家族や村落などの如く、個人にとつて身近で緊密な関係のある基礎的媒介集団にしても、又学校や工場の如き派生的、機能的媒介集団にしても、それぞれ固有な伝統や性格、外囲の社会（例えば町村を囲む郡県、家族を含む国民など）の特徴その他によつていろいろ違つてくる。一般に文化の程度低く、又機能分化の乏しい原始社会にあつては社会的規範の重点は内に隠れた思惟様式に置かれることはなく、一見してわかるようなあらわな行動様式だけに置かれて、慣習や因襲の如き規範が圧倒的拘束力を持つ。しかもそれらの行動規範は頗る煩瑣で冠婚葬祭はもちろん、その他生活のあらゆる面にわたると共に規範の違反に対する制裁も極めて厳しい。従てわずかな逸脱や非同調も忽ち非難叱責を招き、堪えがたい侮辱や嘲笑の的とされる。そこでは自由行動の範囲が大に制限されて、異質成員を寛容する雅量が甚だ乏しい。

他方権威主義に立脚する身分的階級社会にあつては家長、族長その他の支配者の権力は圧倒的に強い。それ故このような身分関係のやかましい階級社会に成立する社会的規範はおのずから少数上層者にだけ有利で、残余の人々には頗る不利益な拘束を加えるものとなる。その場合社会化も亦権力者や権威集団の圧力を含むものとなり、その目的は被支配者乃至下層者に一種の劣等感を植えつけ、隸属又は窮乏の境涯を運命として諦めさせ、以て忍従の徳を強いるようなものとなりやすい。このような差別的で不平等な階級的思惟行動規範を固守し、それへの同調を強いることによつて身分的社会構造と、それに伴う身分的文化体系を維持しようとするのは、人權の尊重と主体性の確立とを強調する現代の文化的自由人にとつて、甚だ奇怪な許し難い事と思われるに違いない。けれども彼等自由人の所屬する現代文明の国々に於ても、その歴史を回顧するならば、恐らく過去の余り遠くない時代に同様の権威



主義的社会文化体制の生んだ階級道德や身分的慣習の如き思惟行動規範の永く支配していたことを否定し得ないであろう。否今日でもなおそのような道德や慣習が、いわゆる封建遺制に附随して、少くとも部分的に残存しているのを認めざるを得ないと思う。

現代社会はその機能の分化が著しく、無数の異質的な地位と役割、更にそれらの地位を占め、役割を演ずる多くの異質的成員を含む極めて複雑なものとなつてゐる。従て社会化の媒介集団と云つても、それは多種多様であるばかりではなく、同一の集団でもその内外の情勢の推移に応じて絶えず構造の動揺、統制力の消長を免かれ得ない。殊に外囲の大社会の中に分化し派生した多くの部分社会が各自その機能上の麻痺状態を呈し、或は互に矛盾衝突の關係に立つようになると、大社会そのものの統合も乱れ、成員も安心して依存できる規準を失つて、いわゆる社会解体の様相が現れてくる。このような解体の過程にあつてはあらゆる時代、あらゆる社会に妥当すべき思惟行動様式としての普遍的、本質的社会規範は無視又は輕視されて、それぞれの部分社会にだけ通用する特殊の局部的規範が強調されるようになる。このように過度の分立的自己中心主義がそれぞれの部分社会を左右するとき、それらを内包する外囲の大社会の解体は避け難いものとなる。

他方又社会解体の兆候は異質文化の侵入又は迎合と、それに伴う内外文化の不消化的混在や衝突の場合にも現れる。ある社会の内部で二つ或はそれ以上の異種文化系統が接触する場合、どのような結果の生ずるものであるかという問題については歴史学、文化人類学、社会学その他の諸社会科学によつて広く研究され、既に多くの具体的事例が示されている。社会文化体系の動態に関する広範な考察を遂げたP・A・ソローキン<sup>(註5)</sup>はこれら多数の事例を比較検討した上、結論として次の七公式を挙げ、それによつて異文化接触の結果を説明した。

(a) 互に最も親近的な二種異文化の体系及び集積は最も容易に一方の文化から他方の文化へと移入しやすい。

(b) 最も単純、応急、有効で、しかも接近しやすい文化は最も迅速に移入しやすい。

(c) もし接触する二種異文化のうちに優劣の差があれば、上位文化から下位文化への下向の流れはその反対の上向の流れよりも勢が強く、又上位文化の所産は一応完成された文化として下位文化に流入する。

(d) 接触する二種異文化のうちにあつて、互に最も非親近的な要素は、諸種の圧力の加えられない限り、相互に混合することは殆どない。

(e) 接触する二種異文化のもつ最も矛盾した価値は互に衝突することになるであろう。そして両文化は暫くの間こそ文化集積として共存することはあり得ても、結局争わざるを得なくなる。その場合もし両者の勢力が等しいならば、和解のための先決要件として両者はまず互に中和して、根本的に変容されなければならない。けれどももし一方が他方よりも一層有効適切であれば、一方は他方を駆逐するか、或は従属させてしまうであろう。しかしその場合勝を制した方の文化でも恐らく多少の変容は免かれないであろう。

(f) もし接触する二種異文化が相互に中立的であれば、相互親近的二種文化の場合ほど容易ではないにしても、ある程度互に混合するであろう。

(g) もし条件さえ良好であるならば、二種の相互矛盾的文化の衝突からも、又二種の相互中立的文化の混合や、更に二種の相互親近的文化の混合からも、何か新しい発見又は創造が現れ、新しい文化体系を設定することによってそれまでの文化的葛藤を解消するであろう。

以上述べた異種文化接触の結果についての問題はまた二つの異つた社会化過程接触の問題にも通じる。それ故前

掲の七公式は後者の場合にもよく当てはまるものと考えられる。即ち例えばある人々は互に異質的な社会的規範を守る二つ或はそれ以上の媒介集団による異つた社会化的働きかけに相遇することがあるであろう。その場合、外集団の規範と内集団の規範とは互に親近、矛盾、或は中立の何れかの関係に於て接触する。また例えば或る子供に対する家族集団の加える躰と学校集団の行う躰とが親近又は矛盾の關係に立つこともあれば、更にまたあるキリスト教信者の勤人が勤務先の会社で同調を求められる規範と、教会で教えられる規範的思惟様式とが相互に中立的であるというようなこともある。こうした種々の場合にどの社会化的過程が勝を制するか、如何なる社会化の媒体や内容に變容が起るか、或はまた如何なるときに社会化の新内容が創り出されるかというような問題も大体前掲七公式に照らして説明することができる。

註5 P. A. Sorokin, *Society, Culture, and Personality: Their Structure and Dynamics*, 1947. P. 578.

### 三

大戦争や大革命などのような激しい社会的變動の直後數年間にわたる混乱期に精神神経症に悩まされる人々の少なくないことは多くの国に於て報告されている。もちろんそのような神経症發生の原因はいろいろあり得るであろうが、社会学ではその主要原因を社会文化的条件の激変に歸している。例えばソローキン<sup>(註6)</sup>によると社会的秩序と文化的諸価値とがばらばらに離れて不統合の状況を呈するような社会では神経症の増加する傾向があり、その誘因としては(1)それぞれの社会的及び文化的構造の煩瑣と内的矛盾、(2)突然の衝撃、(3)一連の文化的条件から他の一連の条

件への余りに容赦なき移行、の三つが挙げらる。更に彼は社会構造及び文化体系の成立、変化及び衰退の過程と、人々の人格の発達及び変化との間に相互関係のあるのはもはや疑のない事実であり、むしろ両者は同一社会文化現象の異つた二つの側面に過ぎないことを強調している。

これと同様の見解はT・M・ニューコム<sup>(註7)</sup>のいわゆる非社会化 (desocialization) の説明のうちにも窺知せられる。彼の見解によると社会化という概念は永い間、子供がその社会的相互作用を通じて変容されていく過程という意味に用いられていたが、子供はこの過程のうちにあつて社会的諸規範を内面化(吸収)し、役割体系の中で一つの地位を占め、更にその人格を築くようになる。人格の発達は社会化の問題だけに限られるのではなく、むしろそれは次々と到来する内外及び社会的、非社会的のあらゆる影響に対する多少とも統合された適応の仕方を表現する。けれども人間の人格にとつてこれらの社会的影響は最も肝要なものであり、従て人格発達の問題の極めて大きな部分は社会化に関する理論によつて説明することができると云ふ。以上の如く論じたニューコムは更に人格障害と云われるものの多くが、実は社会化過程の挫折又は逆転としての非社会化の現象であることに注目した。

英国では第二次世界大戦で捕虜となり、永い間日本及びドイツに抑留生活を送つた後ようやく祖国に引き揚げて来た多数の帰還兵士の神経症について綿密な調査が行われた。精神治療の専門医達をはじめは診断の結果別に精神病に罹りやすい先天的素質を彼等に認めなかつたので間もなく自然に回復するものと予期していた。ところが帰還後一八カ月又はそれ以上を経過しても、その重い症状の治らないものが約三分の一もあつた。そこで英国政府当局者は精神医の協力を得ていろいろ観察、診断をした結果、この神経症の有力な原因が次の諸点にあることを認めた。即ち彼等帰還兵は戦争のためまず民間の市民生活を離れて馴れない軍隊的環境に閉ぢ込められ、次いで海外の戦場

その他に派遣され、最後に捕虜として収容所に抑留されるという、この三段階の著しい変化を受け、しかも相当長期にわたつて全く異質の文化の下に置かれていたのであるから、終戦後突然故国の社会文化的環境に引き戻されても、仲々それに適応できなかったのである。つまりそこには英国的文化型に対する社会化の挫折又は逆転が現れたのであつて、彼等の神経症は主としてこのような非社会化に基く人格の障害と見做されるに至つた。かくて英国政府はこのような障害を除去する手段として帰還市民再調整団 (Civilian Resettlement Units) と称される団体の宿舍を帰還者出身地方別に二〇箇所設置し、その各々に二四〇名ずつを収容した。これは海外の抑留者収容所の生活から突然故郷の町村生活又は家庭生活に復帰することが帰還者に神経症を起させるほど激しい衝撃を与えるものであることを認めた政府当局が、その衝撃から生ずる障害を出来るだけ防止又は緩和するために設けた中間的団体の宿舍であつた。そして帰還者はこの宿舍で暫定的共同生活を送りつゝ、一面では戦争以来の特殊経験に基く習性を無暗に抑圧することなく、他面では時々開催される談話会、舞踏会その他に招かれて出席する彼等の家族、親戚、知友などとの面接団樂の機会を持ち、その間に故郷の規範的思惟行動様式への漸進的再社会化 (Resocialisation) を遂げるようになったのである。この帰還市民再調整団の設置が彼等の神経症治療に非常に有効であつたことは同団の宿舍に入ることなく直接故郷の家庭に復帰した他の神経症の帰還者達との比較調査を行つた学者達(註8)の報告によつて明かにされている。

英国で外地抑留生活からの帰還者の一部に現れた非社会化的傾向に似た現象はソ連の収容所に永く抑留されていた我国の引揚同胞の一部にも認められた。昭和二十四年の最初の引揚船入港以来相次いで帰還した引揚者のうちには舞鶴まで出迎えに赴いた援護局の役人や有志の人々に対してはもちろん、自分達の家族の者に対してまで極めて

冷淡で、しかも敵意的とさえ思われるような態度をとる者が少くなかった。その時彼等が歓迎のプログラムを無視してこれに応ぜず、黙否、吊しあげその他の手段によつて示した反抗的氣勢は内地の同胞の等しく意外とし、理解に苦しむところであつた。けれどもこうした態度は決して出迎えの個々の役人や有志者、又歓迎プログラムの個々の内容に対してではなく、彼等が外集団と見做した内地の国民一般、或は又その外集団によつて企てられたプログラム全般に対して示されたのである。この場合、引揚者は出迎えの役人又は有志者などによつて代表されている内地の国民全体に対抗する一つの彼等自身の内集団を形成し、その成員としての集団意識に基いた一種の皮肉な非好意的祖国觀を共有していたわけである。しかも彼等のこの内集団は必ずしも同時同船で帰国した引揚者だけの一時的小集団ではなく、恐らく当時なお非常に多くの数にのぼつていた未帰還の在ソ連抑留邦人をも含む持続的大集団であるかの如き推測を起させるものであつた。

これに反して内地の人々は引揚者を日本の国民的内集団に属する同じ仲間と信じ、外地派遣以来久しきにわたる彼等の奮闘と忍苦に対して心からなる感謝と深い同情の念とを以て温く迎え入れようとしたのであつた。ところがそこに大きな喰い違いのあることが発見されたのである。戦前の彼等は内地の多数国民と同一の歴史と環境の下に生れ、かつ育成されて、同じ社会的規範意識をもつ連帯者であつた。やがて未曾有の大戦争が展開されて応召し、外地に派遣されると彼等は忽ち一切の身近なもの、親愛なものから切り離され、更に長期にわたつてイデオロギーを異にする外地の社会文化体系の中に隔絶されてしまった。かくて彼等がいつの間にか内地の国民と共有していた社会的規範意識の連帯を絶ち、内地の思惟行動様式を彼等の融和し難い疎遠なもののように見るようになったとしても、それは決して不思議だとは云えない。云わば彼等はよく適応し、同調していた日本国民としての思惟行動規

範を無理やりに剝奪されていたようなものである。帰還当時及びその後暫くの間、彼等の示した種々の非社会化的傾向は主としてこのような社会文化的事情によるものと解すべきである。

註<sup>6</sup> P. A. Sorokin, op. cit. P. 345.

註<sup>7</sup> T. M. Newcoml, op. cit. P. 475.

註<sup>8</sup> T. M. Newcoml, op. cit. P. 476 ff.

A. Curle, Transitional communities and social re-connection, Part I. Human Relations, 1947. I. No. 1, 45-68.

A. Curle and E. L. Trist, Transitional communities and social reconnection, Part II. Human Relations, 1947.

I. No. 2, 240-288.

#### 四

社会化は社会的人格を養成し、所属社会の成員たるに相応する思惟行動様式を体得させる過程だと解釈される限り、それは個人の社会化を意味し、人格の形成又は発達をその主要目的とするものとなる。すべて人格の発達、従て個人の社会化にはこれを可能にさせる次の七条件<sup>(註<sup>9</sup>)</sup>があると見られる。

(1) 人々の相互作用がなければ人間の心的発達是不可能である。

(2) 数世代にわたる人間の相互作用がなければ経験又は文化の如何なる集積も実現できない。なぜならば思想も文化価値も生物学的に遺伝されるものではないからである。

(3) 多数の人々に共通する集合的经验がないと真偽、正邪、正常異常の区別を立て得るようにならない。

(4)常に変化しつゝある社会文化的世界の不斷の刺激がないと意識的精神生活の發達は決して起らない。なぜならばそのような刺激のない場合、人間は心的昏迷に陥るか又（環境への適応が充分に遂げられている時には、他の諸動物と同様に）もはや根本的変容のできない一種の本能的メカニズムを發達させてしまふであらうからである。

(5)人々の相互作用という枠がないと記憶、想像、分析、概括、綜合などの能力の進化も、また同一、差異、因果、時間、空間、数の如き基本的範疇の創造も不可能となつてしまふ。これらは何れも相互作用と、社会の分化、層化及び統合の發達に随付してだけ現れてきたのである。

(6)人々の相互作用がなければ言語も生れ得ない。言語の諸課程は社会の変動と密接に結びついている。

(7)組織され、分化された諸集団がなければ發明（精神的進化と社会文化的進化との究極の源泉）は少くとも注目すべき程度には、生じ得ない。いわんや我々の諸發明を保存することもできない。如何なる時代の發明の類型も社会構造と文化体系との性質によつて決定されている。

以上の諸条件を見ると人格の形成又は發達としての個人の社会化が如何に強く社会文化の組織に依存しているかと判る。即ち人々の相互作用と、それに基づく社会文化体系とこそは個人の社会化過程の根底をなすものと云うべきである。

社会化の対象と媒体とについては既に論述したが次に問題となるのは一体何を社会化するのか、即ち社会化の内容は何かと云うことである。そしてこゝではその内容を客観的には文化、主観的には社会的規範意識と規定したい。その場合社会化そのものの作用は一定の文化なり社会的規範意識なりを人々の間に普及し滲透させることを意味する。このように内容に重点を置いて考える時社会化の問題は個人から文化へと転じ、個人の人格から文化の性質へ



と移行する。けれども個人の社会化と文化の社会化とはそれぞれ独立の別問題ではない。むしろ同じ社会化の現象を考察するときの視点がその対象たる個人から、内容たる文化へ転じたまでのことに過ぎない。

さて文化はこれをいろいろの立場からいろいろな意味に解釈する学者があつて、一義的に規定することの甚だ困難な概念の一つである。けれども今は社会化の内容としての文化に限定して、これを社会的人間が共通に持つ思惟行動様式であると定義して置く。こゝで社会的人間と云つたのはそれが単に生物学的有機体、即ち動物としての人間と区別するためであり、又共通にもつと云つたのはある一個人の思惟又は行動の特殊様式が、他の人々のそれと共通のものとならない限り、換言すれば社会的価値として人々の間に通用するに至らない限り、少くともそのまゝでは未だ文化とは称し難いからである。又思惟行動様式としてあるのは、厳密に云えば、思惟様式と行動様式との両者又は何れか一方とすべきところを略してこのように表現したのである。思惟と行動とはこれを分つ必要がないとする行動主義的見解に従て思考や思想を悉く隠れた内的行動だと解するならば両者を分けずに単に行動様式のみ云つても差支ない。けれども外から知覚することのできるあらわな行動を以て心、精神、思想などの客観的表現であると思倣して行動を意味又は価値に於て理解する必要を認める立場からはやはり思惟様式と行動様式とを區別して考える範圍を保留して置く方がよいと思う。

次に文化の社会化と云つてもそれは文化の創造及び客観化との連関に於て考えられなければならない。その場合社会化の任務は創造され、客観化された文化を共通の規範的思惟行動様式として社会の各成員に普及滲透させることにある。従て文化の社会化が可能となるためには先ずその文化がある個人又は集団によつて創造されていなければならない。ここで創造というのは将来文化として通用するような思惟行動様式の原型が着想、組織、表現される

ことである。けれども文化のうちにははじめてその原型を創造した一人又はそれ以上の人々の誰であるかを明かに指摘することのできないもの、つまりいつ、どこで誰が創り又はまとめたのか全く見当がつかず、従て結局ある社会又は集団のうちで誰によるものなしに、いつのまにか醸成されたもの、即ちヴントのいわゆる民族心理学的現象に相当するものもある。言語、神話、民族宗教、習俗、慣習など、又特に原始的規範の殆どすべてはその起原を一定の個人、一定の時間に帰することのできないものである。しかしそのような起原が不明又は探究不可能であるかと云つても、それは決して文化に創造者のなかつたことを意味する筈はない。むしろそのような社会ではたゞ成員の同質性の度が著しく高く、互によく類似していたので特に個人的創造者の名を銘記する必要も希望も起らず、それが不明であつても少しも差支なかつたのであらう。

創造された文化の原型も、それが単に個人的のものにとどまり、人々の間に受容され共通化されない以上、未だ真の文化とは称し難い。しかしそれが他人の注目をひき、他人によつて認知されるためには何等かの手段で客観化されなければならない。客観化というのはただ人の注意を引きやすくすることを意味するのであつて、それは文化の社会化に先立つ一つの中間段階である。印刷、講演、説教、展覧、演奏、映写、放送その他、新しい発想なり、表現なりが客観化されるための手段はマス・コミュニケーション時代の今日極めて多種多様に発達しているが、そのため却つて社会化するに価しない不純又は有害な思惟行動様式まで流行するような場合もある。以上述べた創造、客観化及び社会化の三段階は一切の文化体系の成立及び維持にとつて欠くことのできない基本的過程であるけれども、これら三者はそれぞれ必ずしも順調に、かつ迅速に相前後して進展するものとは限らない。発想、組織、表現などの創造過程に非常な困難と長年月を要する事もあれば、又客観化の手段の未発達や利用困難などのため、

折角の優れた着想も世人の知るところとならないで、そのまゝ埋没してしまうようなこともある。このように創造から社会化までの文化の運命に迂余曲折のありうることは世界文化史の明かに示すところである。そしてたとい創造があり、客観化が行われても、遂に社会化されるに至らなかつたものは結局真の意味での文化としての成長を見なくて死滅してしまう。なぜならば人々の間に普及し滲透しないような思惟行動様式はこれを存続させる基礎としての社会的支持者を欠くことになるからである。この点から見ても文化体系の成立及び維持にとつて社会化の過程が如何に大切であるかと理解される。

社会化によつて人から人、世代から世代へと普及し、滲透する文化は思惟行動の社会的規範としての性質を持つ。文化の思惟規範は社会的に拘束された精神作用の様式としての学問、倫理、芸術、宗教などに関する一切の觀念形態であり、又行動規範は例へば礼儀、作法、習俗、慣習その他一切の言動を社会的に規定又は拘束する規範である。<sup>(註10)</sup> 高田保馬博士の説明したように思惟様式は「なせ、なすな」「思え、思うな」のように命令と禁止との両面にわたるものであつて、一つの思惟体系は殆どこれらすべての面にわたり、宗教であると共に倫理であり、又行動の命令ともなる。未だ体系とは云い難い一つの社会意識の内容でも思惟と行動の両様式を含むものが多く、實際に於て両者は離れることなく互に絡み合つていのである。今例えばある慣習（一種の行動規範）に対する反抗が起つたとき、その慣習の妥当性を説明し、根拠づけるためにある道德思想が利用され、これに結びついてくるとする。その場合利用された道德思想は慣習の持つていた拘束力によつて支持され、その思想を承認しないものは慣習を否定することになると考えられて、思惟様式そのものが拘束力をそなえた規範となつてくる。これによつても思惟規範と行動規範とがいかに表裏一体的關係を持つものであるかがわかる。

註 6 P. A. Sorokin, op. cit. P. 344 f.  
註 10 高田保馬 社会学大意 一九五〇年 九八頁参照

## 五

社会化の内容は上述のように客観的には思惟行動様式としての文化であるが、又主観的には思惟行動を統制し、拘束する社会的規範意識であると思ふこともできる。規範意識という概念は既にヴィンデルバンドによつて規範の統一的支持者としての非現実的、理想的意識という意味で使用されたことがあるけれども、ここで社会的規範意識というのは究極に於てそのような普遍妥当の先驗的規範についての非現実的、理想的意識を志向することはあつても、実際にはむしろ限られた時、限られた社会にだけ妥当する經驗的規範についての意識である。換言すれば普遍的、本質的であると思ひ、又そのように要求しながら、実は時代により、社会によつて変化する時間的、特殊的規範の意識である。従つて妥当する範囲から云えば、社会的規範は従来屢々全体社会として觀念されたことのある国家や民族などの範囲を越えて、更に広く全人類又は未来の世界連邦というような最大の全体社会に妥当する場合に普遍的、本質的と思ふされ、又国家や民族などから村落や家族に至る大小さまざまな部分社会の何れかにだけ妥当するものであるとき時間的、特殊的と意識されると見て差支ない。

次に社会的規範意識は社会学に於て単に社会意識と呼ばれているものと原則的には決して異つた概念ではない。ただここでこのような重複的概念を採用したのはこの概念がいわゆる社会意識のもつ二つの主要属性、即ち社会性

と拘束性との両者を明示しているからである。その点で社会的規範意識と社会意識とを同一視することは少しも差支ないのであるが、しかし前者は決して社会实在論者の説くような超個人的、超心理的の实体としての社会そのものにそなわると觀念された架空的、超越的社会意識を指すのではない。それは飽くまでも個人を主体とし、個人によつてのみ抱かれる意識であつて、その点では個人意識と少しも異なるところがない。けれどもそれが特に社会意識と呼ばれるのは、この意識が単にある一個人だけのものとしてではなく、他の多数の人々にも共通に抱かれ、或はそのように意識されているからである。もちろん多数の人々というのは必ずしもある社会の全成員乃至過半数を指すとは限らない。それよりはむしろ社会に及ぼす影響力の比重が極めて大きいと主観的に觀念される程度に多数の人々のことである。もしある意識がこのような意味での多数者に共通しているとするならば、それはその意識が社会的規範意識であることの一つの特徴、即ち社会性をそなえていることになる。なぜならば自分以外の他の多くの人々も共通にもつ意識であるという感じ、又は考えはその意識が単に一個人だけに内在するのではなく、むしろ同一意識の多数者による分有とでも表現することができ、従て又ある一個人の分有している部分を仮に無いものと見做しても、なお他の多くの人々によつて分有されている部分が残されていると感じられるという意味で、その意識の外在的であることが認められるからである。この場合の社会意識の外在性は個人を除外し、かつその個人の外だけに在るというのではなく、個人に内在すると同時に他の多くの人々にも内在するという認識に基づくのである。それ故厳密に云えば外在ではなくて内外在の意識である。このような内外在の社会意識であればこそ、はじめてもう一つの主要特徴としての拘束性が作用するのである。

社会的規範意識の拘束性というのは云わば人々の思惟行動にある一定の軌道にのせ、従て他の勝手な方向にそれ

るのを許さないことである。その軌道に馴れないか、これを嫌い又は承認しない人にとっては拘束であるが、それによく適応している人にとっては拘束とは感じられないかも知れない。けれども規範はすべて他律的又は自律的の制約であるから、外部からの強制たると自発的な自己規制たるとを問わず、やはり拘束性を特徴としてそなえていることになる。そして社会の成員として、全体の一部として、他の人々との相互関係を結んで生活する以上、人々は決してこのような拘束の意識から免かれることはできない。それは社会的規範意識の主観的表現としての義理、人情、良心などに於ても、又その客観的表現としての風俗、慣習、法律などに於ても強弱さまざまの程度に於て感ぜられるものである。それならば一体そのような拘束の生ずる理由はどこに求められるであろうか。この点について高田博士は<sup>(註11)</sup>(a)多数人の思うところに正しさがあるであろうとされること。(b)情意の連帯性のあること、の二つを挙げている。まず(a)について考えてみるに多数人の思うところと云つても、その多数人が自主的、批判的に物を考える人々でなければ意味をなさない。附和雷同的な衆愚の見解が少数賢徳の見解よりも正しいと見ることはもちろん許されるべきではない。しかもその量が主観的に感ぜられた多数であつて、客観的に数えられた多数でないとするならば、そこにも亦信頼し得ないものがあると云わなければならない。このような信頼し難い若干の欠点があるため(a)を以て拘束力発生の本来的理由と認めることには問題があるが、しかし現実の社会、特に民主的な社会では成員の質の向上に伴つて(a)は益々有力な原因と見られるようになりつゝある。

次に高田博士が拘束の生ずる理由として(a)よりももつと根本的であることを強調した(b)の理由について考えてみよう。博士によれば情意(又は欲望)は常に何のために、誰のためという帰属主体を持つ。もちろん社会自体がそのような情意を持つ筈はないから、それを意識する主体は個人である。しかもその情意の向けられている

方向は当の個人自体とは限らない。例えば今ある人が母校の施設拡充のため情意を傾けて資金の募集に当つてゐるとする。この場合意識主体はその個人であるが情意の帰属主体は母校である。このように情意が一定の個人なり社会なりに向けられて、その帰属主体の明確に示し得る場合が多いのではあるが、母校のためとも、国家のためとも限定し難く、例えば芸術のためとか学問のためとかいうように文化そのものを帰属主体と見做さなければならぬ場合もある。何れにしても情意はその帰属主体が同一であるとき連帶的と認められる。そして帰属主体の共通的事であることに基く情意の連帶が意識されている時に、はじめて母校に尽す自分と同様に他の同窓生も尽すべきだと要求することができ、又反対に他の同窓生からも同様のことを自分が要求されることになる。この場合帰属主体は共に同一又は共通の母校であり、しかもそれに情意を傾倒することが自分及び他の同窓生に要求されてゐるのである。それ故このような意味での連帶的情意を他人が抱いてゐることを知るとき、その他人がその情意を自分にも持つように要求しているのだと感ぜられてくる。そこに一種の圧迫があり、拘束があると意識される。同様に社会の多数の人々に情意の連帶のあるとき、その一員である自分は他の諸成員の無言の要求を以て圧迫され、拘束されているという意識を生ぜしめられる。社会的規範意識に於ける拘束性の由つて来るところは高田博士のいう如く、このような原因にあると見做すことができる。けれどもこうした拘束の力は情意の連帶性によつて結ばれている人々の意識を一刻も離れずに常に現れているわけではない。それは丁度社会的規範意識の一種である慣習と同様に時と場合によつて若干の人々の意識に浮び上つて、その思惟行動を拘束するものであるから、意識ではあるが断続的なく、ただいつでも識閥にのぼり得るように準備されている可能としての内容と見るべきである。

以上社会化の内容としての社会的規範意識の意味及び性質を略述したが、これを要するに社会化は外在的、他律

的であると思われる社会的規範が内在的、自律的のものとなり、自発性を以て実践されるようになるとき最も成功したことになるものである。

註11 高田保馬 前掲 九三頁